
精神分析の仕事

セクシュアリティ, 時間, 精神分析のころ

ダナ・バークステッド・グリーン著
松木邦裕, 富田悠生監訳

金剛出版, A5判 280頁, 4,620円, 2025年11月刊

(東洞院心理療法オフィス／太子道診療所) 北村婦美

本書は、英国の精神分析家ダナ・バークステッド・グリーンによる論文集である。

彼女はアメリカで生まれ、英語話者の両親のもと、パリやジュネーブといったフランス語圏で育った。その後、英国で訓練を受けて精神分析家となってからは、長らく『国際精神分析誌』の編集長も務めた。そのライフコースからも分かるように彼女はバイリンガルであり、編集の仕事を通じて異なる諸学派の

理論に触れつつ、臨床場面で生じる現象について思索を深めてきた人物である。

今回、評者はこの訳書の出版を知り、みずから進んで書評を引き受けた。それはまず、彼女が編者を務めたThe Gender Conundrum (1993／邦訳はないが、タイトルを直訳すると『ジェンダーという難問』)に寄せたIntroductionが、素晴らしかったからである。ジェンダーをテーマにした書物というと、扇動的なレトリックに満ちたものを想像する人もいるかもしれない。しかし彼女の書く総説には、時代的にも空間的にも俯瞰的かつ冷静に問題をとらえる姿勢が貫かれていて、精読すれば頭が整理されることこの上ない。

また彼女の論文“Phallus, Penis And Mental Space” (1996／「ファルス、ペニス、心的空間」)は、精神分析論文の国際的オンライン・アーカイブであるPEPにおいて、近年まで高い閲覧頻度を保ち続けていることから分かるように、現在世界的にも非常に注目されている仕事である。なぜだろうか。

これまでの精神分析は、エディプス・コンプレックス論の一般的イメージから、「父の禁止」「去勢」「超自我＝内在化された父の声」といったタームで理解されることが多く、父を中心とした権威構造を前提とする理論として受け止められがちであった。しかし近年の精神分析では、そうした関係性構築のあり方が本当に唯一「正常」な発達のゴールとして望ましいのかという問い直しが、各所から生じてきている。米国においてこうした問い直しを行った人物の一人としてジェシカ・ベンジャミンを挙げることができるとすれば、本書の著者であるダナ・パークステッド・ブリーンは、英国精神分析の中から、内容的にはきわめて近い問題意識を示し始めた人であるように思われる。

『精神分析の仕事』では、そうしたエポックメイキングな論文の日本語訳が、初めて発表されることになる。もちろん著者には、時間についてや、分析家が行っている仕事の性質そのものについて考察した論文など、他のテーマに関する重要な仕事も多く、それらも本書には収載されている。短時間で読み飛ばせる類いの書物ではもちろんないが、詳しい臨床場面の記述も豊富であり、難解そうに見えて実際は、深く臨床に根ざした論文集だと思う。人間のこころの働きの深い部分に関心をもつ読者には、ぜひ手に取ってほしい一冊である。

原書：Dana Birksted-Breen : The Work of Psychoanalysis : Sexuality, time and the psychoanalytic mind
